

平城宮と平城京の調査



興福寺中門（第297次調査）

興福寺による「境内整備構想」にもとづき、今年度から主要堂宇地区の中金堂、中門・回廊、南大門およびその周辺地区を継続調査することとなった。第1年次は中門全域と東西に取り付く南面回廊を対象とした。本文50頁参照（撮影／佃 幹雄）

第一次大極殿SB7200（第295次調査）

平城宮第一次大極殿の遺構は奈良時代後半の大規模な整地造成などにより、基壇土はほぼ完全に削平され、最下部の地覆石痕跡を残すのみである。しかしこのわずかな痕跡が、建物の復原考察にとって重要な情報を与えてくれるのである。本文4頁参照（撮影／牛嶋 茂）

西隆寺出土銀製帯先金具
(第299次調査)

対葉花文をあしらった小さな金具である。材質は純銀にちかい。その用途については、装身具、刀装具などさまざまな可能性があるが決め手はない。いずれにしても人々の目を驚かせ、身分の差を認識させるものであったろう。本文58頁参照 (撮影/佃 幹雄)

木樋調査状況 (第296次調査)

細かく区画された宮内の施設において、滞水を防ぐための排水施設は不可欠なものであった。第一次大極殿院の築地回廊をくぐりぬけるこれらの木樋も効果的な機能を果たしていたのであろう。本文17頁参照 (撮影/佃 幹雄)

馬寮東方地区SB18000 (第298次調査)

過去の調査で存在が想定されていた布掘りを伴う大規模な礎石建物を調査した。これによってこの一画は東西対称に配置する建物群を持つ施設であることが明らかになった。記録にあらわれる「西池宮」が有力な候補となる。本文24頁参照 (撮影/佃 幹雄)

東院地区総柱建物SB17800 (第292次調査)

東院西辺部に大規模な総柱建物の存在を明らかにした。関係資料の検討からこの建物は眺望を得ることを目的とした「楼閣宮殿」と呼ぶにふさわしい。眺めはどんなものであったのだろうか。本文36頁参照 (撮影/牛嶋 茂)